舌下面に発現したリンパ上皮性嚢胞の1症例

津留 昭二・杉本 忠雄・姫田 東高・西野 一寿
赤間 功・山野 貴教・黒川 英雄・梶山 稔

Lymphoepithelial cyst of the ventral surface of the tongue

—Report of a case—

Shoji TSURU・Tadao SUGIMOTO・Harutaka HIMEDA
Kazuhisa NISHINO・Isao AKAMA・Takanori YAMANO
Hideo KUROKAWA・Minoru KAJIYAMA

Abstract: The lymphoepithelial cyst commonly occurs on the lateral aspect of the neck, but rarely in the oral cavity.

The cyst is characterized by a cystic cavity lined by stratified squamous epithelium, surrounded by lymphoid tissue.

We report a case of the oral lymphoepithelial cyst in the right ventral surface of the tongue with some discussion.

The case was ■ year-old female who complained of a small mass on the right ventral surface of the tongue. As clinical findings, the mass had 10 mm×7 mm oval shape, clear border, smooth surface, and was elastic soft.

The prognosis is fairly good after surgical treatment and there is no recurrence after one year.

Key words: lymphoepithelial cyst, oral cavity, tongue

緒 言 症 例

1949年, King ら¹⁾により側頸部に発現する 嚢嚢胞・branchial cyst は, その病理所見からリンパ上皮性嚢胞・lymphoepithelial cyst と呼ばれている。一方, Bhaskar (1966)²⁾ も口腔粘膜に発現した同疾患に同じ名称を使用している。しかしながら本疾患はまれとされ^{3,4)}, 本邦における報告例は少ない^{5,6)}。

今回, わたくしたちは舌下面に発現したリンパ上皮性嚢胞の1症例を経験したので, 若干の文献的考察を加えて報告する。

患 者: ■■■歳 女性。

初 診: 昭和61年7月■日。

主 訴: 左側舌下面の腫瘤。

家族歴: 特記事項はない。

既往歴: 31歳のとき卵巣腫瘍の摘出をうける。47歳で狭心症と診断され, 20年間通院し加療をうけたが, 現在は治療をうけていない。

現病歴: 昭和60年7月, 左側舌下面に腫瘤を気づいたが, 特別な症状もないため放置していた。昭和61年6月, 補綴治療のため某歯科医院を受診した際, 舌下面の腫瘤を指摘され, 精査のため紹介により, 当科を受診した。

現 症

全身所見: 体格, 栄養状態とも良好で, 全身的にも異常所見は認められなかった。

九州歯科大学口腔外科学第2講座

(主任: 梶山 稔教授)

The Second Department of Oral Surgery, Kyushu Dental College (Chief: Prof. Minoru Kajiyama)

受付日: 昭和62年7月25日

写真 1 初診時の口腔内所見
矢印は腫瘤を示す。

写真 3 腫瘤中央全断面の病理組織像
(H-E 染色, 弱拡大)
□内は胚中心を伴ったリンパ濾胞を示す。

写真 2 摘出物および全断面所見
被膜に覆われた充実性の腫瘤。

局所所見：

口腔外所見；顔貌は左右対称で特に異常を認めず，左側顎下リンパ節，オトガイ下リンパ節などに異常を認めなかった。

口腔内所見；左側舌下面で，舌小帯付近の粘膜下に無痛性で，大きさ約 10×7 mmの橢円球形を呈する，境界明瞭な腫瘤を認めた。腫瘤を被う粘膜は平滑で帯黄色を呈し，硬さは弾性軟で，周囲組織との癒着はなく可動性であった（写真1）。

臨床検査所見；血液一般，血清生化学，尿一般検査などにおいて，特に異常値は認められなかった。

臨床診断：脂肪腫の疑い。

処置および経過；局所麻酔下にて全摘出術を行った。すなわち，舌下部腫瘤中央の粘膜上で長軸方向に紡錘状の粘膜切開を加え，粘膜を鈍的に剝離した。腫瘤は周囲組織との癒着もなく，容易に剝離，摘出しえた。術後は，知覚麻痺や舌運動障害，唾液排泄障害などもなく良好に経過し，今日まで再発を認めていない。

摘出物所見：

肉眼的所見；摘出腫瘤は，大きさ $7 \times 5 \times 5$ mm，重

写真 4 写真3 □の強拡大像

量・0.1 g，形状は橢円球形で，表面は平滑，帯黄白色であった。また，摘出腫瘤の中央に割を入れると，乳灰白色でやや粘稠な内容液の流出を認めた（写真2）。

病理組織学的所見；腫瘤中央部を薄切片とし，H-E染色を施して鏡検した。

粘膜下にわずかな線維性結合組織を介して嚢胞壁が認められる。嚢胞壁は錯角化を呈する重層扁平上皮よりなっているが，上皮脚の形成は認められない。また，嚢胞腔内には核を有する剝離上皮細胞やケラチン様物質が一部で認められた。嚢胞壁の上皮下には全周にわたる帯状のリンパ性組織がみられ，その中には胚中心を伴ったリンパ濾胞が認められた（写真3，4）。

病理組織学的診断：リンパ上皮性嚢胞。

考 察

リンパ上皮性嚢胞は1789年, Hunczowsky⁷⁾による側頸嚢胞の報告が最初とされ, 本邦においても宇野 (1905)⁸⁾の報告以来, 側頸部での発現例が多く報告されている^{9, 10)}。しかしながら, 口腔粘膜に本嚢胞が発現した症例の報告は比較的少ない³⁾。

側頸部における本嚢胞の発生機序については, 一般に胎生期の鰓性器官の遺残に由来するとされ^{11~14)}, これまでにさまざまな説が報告されてきた。ちなみに鰓溝説 (1832)¹¹⁾, 鰓嚢説 (1890)¹²⁾, 胸腺咽頭管説 (1912)¹³⁾があげられる。したがって本嚢胞については鰓嚢胞^{14~16)}, 鰓原性嚢胞¹⁷⁾, 鰓裂性嚢胞¹⁸⁾, 先天性側頸嚢胞⁷⁾などの名称で報告されている。しかしながら King (1949)¹⁾は, 鰓原説に対し胎生学的な確証が乏しくこれを否定し, 組織学的な所見を重要視して, 側方リンパ上皮性嚢胞と命名した。また, Bhaskar ら (1959)¹⁹⁾は良性嚢胞性リンパ節, あるいは良性リンパ上皮性嚢胞という名称を提唱している。一方, 口腔内での発現例は Gold (1962)²⁰⁾, Calman (1963)²¹⁾ らにより報告されているが, 発生機序として鰓原説を否定するにはいたっていない。なお Bhaskar ら (1959)¹⁹⁾は鰓嚢胞を組織学的に検索し, リンパ組織内に腺管様構造や上皮巣が認められた症例があったことから, 胎生期に異所性の腺上皮がリンパ組織内に迷入して, 嚢胞化する可能性を示唆し, 迷入説を主張した。Vickers ら (1963)²²⁾も, 慢性炎症や外傷などに起因したリンパ節内への上皮組織の迷入が起こり, 嚢胞が形成されるとしている。さらに Vickers ら (1966)²³⁾は実験的にハムスターの頸部リンパ節内へ頬嚢上皮組織の自家移植を試み, 9例中7例に本嚢胞の形成を認めたことから, Bhaskar ら (1959)¹⁹⁾の迷入説を支持している。

これに対して Knapp (1970)²⁴⁾は, 口腔粘膜のリンパ性組織における腺窩の閉塞により本嚢胞が形成されるとして, 閉塞説を主張した。また, 正常人の口腔粘膜について組織学的な検索を行い, ワルダイエル環以外にも, 軟口蓋, 口底, 舌下面などの粘膜にこれまで知られていなかった口腔扁桃・oral tonsil の存在を指摘し²⁵⁾, さらに詳細に検索し, 腺窩の閉塞が上皮残屑, リンパ球, 多形核白血球などによって起こり, その結果, 口腔扁桃の拡大した状態がリンパ上皮性嚢胞, リンパ上皮性病変などと呼ばれているものであるとした。また自らの提唱する発生機序に基づき, 本疾患を扁桃偽嚢胞・tonsillar pseudocyst として報告しているゆえんとした。最近では Buchner ら (1980)²⁶⁾, Toto ら (1982)²⁷⁾ らが口腔内のリンパ上皮性嚢胞の組織像について検索し, 閉塞説を肯定している。ちなみに本邦でも長谷川ら

(1975)²⁸⁾, 岡田ら (1985)⁵⁾ らが閉塞説を支持している。

このように発生機序については迷入説あるいは閉塞説などがあげられている。一方で, Chaudhry ら (1984)²⁹⁾は, この両説についての問題点を指摘している。すなわち迷入説に対しては, 口腔粘膜では頬粘膜に異所性リンパ組織が多く, 異所性小唾液腺は口蓋に多いことから, 迷入説を肯定するには, 本嚢胞が口底や舌に好発していることから迷入説は矛盾するとしている。また, 閉塞説については口腔扁桃が口底や舌よりもむしろ軟口蓋に多いことをあげ, 本嚢胞の発生には他の要因が関与しているとしている。したがって本嚢胞の多くは舌下腺導管あるいは異所性小唾液腺導管に由来するという仮説をたてれば, 本嚢胞が口底に好発し他の部位にも散発する事実を説明しようとしている。また, 嚢胞壁周囲のリンパ性組織については, 導管上皮の扁平上皮化性による, 非特異的炎症反応か, 自己免疫反応によるものであろうと推測している。

以上のように口腔内のリンパ上皮性嚢胞の発生機序については迷入説や閉塞説, あるいは他に発生原因を求める見解がみられるが, 閉塞説を有力視する傾向にある^{5, 26~28)}ものの定説をみないのが現状である。なお自験例における病理組織学的な検索では発生機序を明らかにしえなかった。

今回, 著者らは, 1962年から1986年までの過去25年間で欧米ならびに本邦から, 口腔内のリンパ上皮性嚢胞として報告されたもの137例を集計し, 調査を行った^{2, 5, 6, 20~22, 24, 26~44)}。

発現部位については口底が83例 (60.6%)と最も多く, ついで舌が38例 (27.7%), 軟口蓋が9例 (6.6%), 以下, 口蓋舌弓, 下顎口腔前庭, 口蓋咽頭弓, 後臼歯部の順であった。また, 欧米では多くは口底に発現していたが, 本邦では舌に多く発現していた。舌発現例のうちでは舌下面が38例中19例 (50.0%), 舌縁が11例 (28.9%), 舌と記載されたものが8例 (21.1%)で, 舌縁に比べ舌下面での発現例が多かった。つぎに本邦報告例における発現部位をみると18例中10例 (55.6%)が舌で, 口底は7例 (38.9%), 口蓋咽頭弓が1例 (5.6%)であった。また, 舌発現例ではすべてが舌下面に発現したもので, 欧米で報告されている舌縁での発現例^{2, 26, 27)}はみられなかった。なお, 欧米では口底, 舌, 軟口蓋などに発現例がみられることから, Knapp (1970)²⁴⁾が指摘している口腔扁桃の存在部位と一致する点に注目された (表1)。

発現年齢については, 口腔内に発現した本嚢胞の発現年齢について明記されたものは119例で, 7歳から81歳までの各年齢層に発現していた。年代別では20歳代が32例 (26.9%)と最も多く, ついで30歳代, 40歳代がともに23例 (19.3%), 50歳代が17例 (14.3%), 10歳代が14

表 1 欧米ならびに本邦での口腔内におけるリンパ上皮性嚢胞
報告例の発現部位について

(1962～1986, 137例)

発現部位	欧 米	本 邦	計
口 底	76 (63.9)	7 (38.9)	83 (60.6)
舌	28 (23.5)	10 (55.6)	38 (27.7)
〔舌 下 面〕	〔 9 〕	〔*10〕	〔19 (50.0)〕
舌 縁	11	0	11 (28.9)
〔単に舌とす るもの〕	〔 8 〕	〔 0 〕	〔 8 (21.1) 〕
軟 口 蓋	9 (7.6)	0	9 (6.6)
口 蓋 舌 弓	3 (2.5)	0	3 (2.2)
下顎口腔前庭	2 (1.7)	0	2 (1.5)
口 蓋 咽 頭 弓	0	1 (5.6)	1 (0.7)
後 臼 齒 部	1 (0.8)	0	1 (0.7)
計	119 (86.9)	18 (13.1)	137(100.0)

* 印は自験例, () 内は%を示す.

表 2 欧米ならびに本邦での口腔内におけるリンパ上皮性嚢胞
報告例の発現年齢について

(1962～1986, 119例)

発現年齢	欧 米	本 邦	計
0 歳～ 9 歳	1 (1.0)	0	1 (0.8)
10 ～ 19	11 (10.9)	3 (16.7)	14 (11.8)
20 ～ 29	31 (30.7)	1 (5.6)	32 (26.9)
30 ～ 39	18 (17.8)	5 (27.8)	23 (19.3)
40 ～ 49	17 (16.8)	6 (33.3)	23 (19.3)
50 ～ 59	17 (16.8)	1 (5.6)	17 (14.3)
60 ～ 69	3 (3.0)	0	3 (2.5)
70 ～ 79	3 (3.0)	*2 (11.1)	5 (4.2)
80 ～ 89	1 (1.0)	0	1 (0.8)
90 以 上	0	0	0
計	101 (84.9)	18 (15.1)	119(100.0)

* 印は自験例, () 内は%を示す.

例 (11.8%)となっていた. なお, 欧米では20歳代で多発していたのに対し, 本邦では30歳代から40歳代に多くみられたが, 欧米に比べ例数にかなりの差がみられ, 特定の傾向はみられなかった. なお, 自験例は■歳で, 比較的高年齢者での発現例と思われる (表 2).

ちなみに本嚢胞の側頸部での発現年齢をみると, Bhaskar ら (1959)¹⁰⁾ は 468 例のうち61%が21～30歳と報告し, Rickless ら (1967)¹⁶⁾ も 31～35歳に多発していたと報告している. 本邦では安藤ら (1966)⁴⁹⁾ が 13～34歳までが60%と報告し, 石井ら (1986)¹⁰⁾ も本邦報告例

の集計を行い, 20歳代が25.8%, ついで10歳代が23.5%と報告している. したがって, 本嚢胞の側頸部における発現年齢と, 口腔内発現例との間に, 年齢的な差異は認められなかった.

つぎに口腔内での発現例のうち, 性別が明記されていたものは149例で, 男性80例 (53.7%) に対し, 女性69例 (46.3%) となり男性に多く発現していた. なお, 欧米報告例では男性76例 (58.0%), 女性55例 (42.0%) で男性に多く, 本邦報告例では男性4例 (22.2%) に対し女性14例 (77.8%) となり, ほとんどは女性に発現し

表 3 欧米ならびに本邦での口腔内におけるリンパ上皮性嚢胞
報告例の大きさについて

(1962~1986, 50例)

大 き さ	欧 米	本 邦	計
2 mm 未 満	0	0	0
2 mm 以上~4 mm 未満	10 (31.3)	1 (5.6)	11 (22.0)
4 mm 以上~6 mm 未満	12 (37.5)	12*(66.7)	24 (48.0)
6 mm 以上~8 mm 未満	2 (6.3)	1 (5.6)	3 (6.0)
8 mm 以上~10mm 未満	5 (15.6)	3 (16.7)	8 (16.0)
10mm 以上~12mm 未満	2 (6.3)	1 (5.6)	3 (6.0)
12mm 以上~14mm 未満	0	0	0
14mm 以上~16mm 未満	1 (3.1)	0	1 (2.0)
計	32 (64.0)	18 (36.0)	50

* 印は自験例, () 内は%を示す.

表 4 欧米ならびに本邦での口腔内におけるリンパ上皮性嚢胞
報告例の臨床診断について

(1962~1986, 82例)

臨床診断名	欧 米	本 邦	計
粘 液 嚢 胞	19 (29.7)	1 (5.6)	20 (24.4)
脂 肪 腫	10 (15.6)	4*(22.2)	14 (17.1)
線 維 腫	7 (10.9)	0	7 (8.5)
唾 液 腺 炎	5 (7.8)	0	5 (6.1)
ガ マ 腫	3 (4.7)	1 (5.6)	4 (4.9)
良 性 腫 瘍	0	4 (22.2)	4 (4.9)
封 入 体 嚢 胞	3 (4.7)	0	3 (3.7)
リンパ組織過形成	3 (4.7)	0	3 (3.7)
類 表 皮 膚 胞	0	1 (5.6)	1 (1.2)
そ の 他	20 (31.3)	1 (5.6)	21 (25.6)
計	64 (78.0)	18 (22.0)	82

* 印は自験例, () は%を示す.

ていた. ちなみに自験例は女性であった. 一方, 側頸部発現例についてみると, Conway ら (1955)⁴⁶⁾, Bhaskar ら (1959)¹⁹⁾, Van de Mark ら (1969)⁴⁷⁾, 大谷ら (1972)⁴⁸⁾ らは性差は認めないとし, 太田 (1963)⁴⁹⁾, 大石ら (1984)⁵⁰⁾ らは男性に, 安藤ら (1966)⁴⁵⁾ は女性に多いと報告しているが, 性差がないとする報告が多い.

口腔内における本嚢胞の大きさについては, 明記された 50 例で, 4~6 mm 大程度のものが 24 例 (48.0%) と半数例近くをしめ, 欧米では 4~6 mm 大のものが多く, 本邦報告例でも多くがこの大きさであった. なかには Guinta ら (1973)³⁴⁾ のように 15×15mm 大の口底発現例も報告されているが, 欧米および本邦での諸家の報告はおおむね 4~10mm 大程度のものが多い. 自験例は

7×5×5 mm 大で, これまでの報告に類するものであった (表 3).

本嚢胞の臨床診断名については, 本嚢胞が口腔粘膜下で境界が比較的明瞭な無痛性の小腫瘍^{8,32)} として発現し, 表面の色調は正常粘膜色³⁵⁾ から帯黄白色^{35,37,40,41)}, 黄色^{34,36,44)} などが報告されており, また, 一般的にも波動の触知が明らかでなく, その臨床診断にあたっては, 口腔粘膜に好発する粘液嚢胞, ガマ腫などの嚢胞性疾患や, 脂肪腫, 線維腫などの良性腫瘍を疑った報告例が多く, 自験例も臨床診断として脂肪腫を疑った. このように臨床所見のみで本嚢胞を明確に診断することは困難なようである^{8,39)} (表 4).

治療法については, 口腔内発現例で治療法が明記され

たものは89例で、全例ともに摘出、ないし切除が行われており、再発例は報告されていない。自験例でも全摘出を行い、現在まで再発を認めていない。

結 語

著者らは、■歳、女性の舌下面に発現したリンパ上皮性嚢胞の1例を経験したので、過去における欧米ならびに本邦における報告例の調査、集計と合わせて報告した。

本論文の要旨は第41回日本口腔科学会総会（昭和62年4月、東京都）において発表した。

引 用 文 献

- King, E.S.J.: The lateral lymphoepithelial cyst of the neck (branchial cyst). *Aust NZ J Surg* 29: 109-121 1949.
- Bhaskar, S.N.: Lymphoepithelial cysts of the oral cavity: Report of twenty-four cases. *Oral Surg* 21: 120-128 1966.
- 石川梧朗監修：口腔病理学Ⅱ。永末書店、京都、1982、403-405頁。
- Shafer, W.G., Hine, M.K., et al.: Developmental disturbances of oral and paraoral structures: A textbook of oral pathology, 4th Ed, WB Saunders Co, Philadelphia, 1983, p 32.
- 岡田典久，渡辺隆史，他：舌下面に生じたリンパ上皮性嚢胞の1例。城歯大紀要 14: 534-539 1985.
- 田中耕一郎，久野 均，他：舌下面にみられたリンパ上皮性嚢胞（鯉嚢胞）の1例。日口外誌 33: 551-555 1987.
- Hunczowsky: Chirurgische Litteratur f. K.K. feld Chirurgie Wein 1789.
- 宇野 朗：先天性頸部ノ嚢腫ニ就テ。医事新聞 640: 49-50 1903.
- Sedwick, C.E. and Walsh, J.H.: Branchial cysts and fistulas. *Am J Surg* 83: 3-8 1952.
- 石井準之助，有藤公夫，他：側頸部にみられたリンパ上皮性嚢胞の1例ならびに文献の考察。日口外誌 32: 1898-1907 1986.
- Von Ascherson, F.M.: De fistulis colli congenitis adjecta branchialium in mammalibus avibusque historia succincta. Bertolini Apud CH Jones 1832.
- Von Kostanecki, K. und von Mielecki, A.: Die angeborenen Kiemenfisteln des Menschen: ihre anatomische Bedeutung und ihr Verhältniss zu verwandten branchiogenen Missbildungen. *Arch Path Anat Physiol Klin Med* 120: 385 1890.
- Wenglowski, R.: Über die Halsfisteln und Zysten. II. *Arch Klin Chir* 98:151-207 1912.
- Frazer, Z.E.: The disappearance of the pre-cervical sinus. *J Anat* 61: 132-143 1962.
- Little, J.W. and Rickless, N.H.: The histogenesis of the branchial cyst. *Am J Pathol* 50: 533-547 1967.
- Rickless, N.H. and Little, J.W.: The histogenesis of the branchial cyst. II. A study of the lining epithelium. *Am J Pathol* 50: 765-777 1967.
- Karlan, M.S., Michel, S.L., et al.: Branchiogenic cysts: congenital or acquired. *Am J Surg* 110: 615-619 1965.
- Chandler, J.R. and Mitchell, B.: Branchial cleft cysts, sinuses and fistulas. *Otolaryngol Clin N Am* 14: 175-186 1981.
- Bhaskar, S.N. and Bernier, J.L.: Histogenesis of branchial cysts: A report of 468 cases. *Am J Pathol* 35: 407-423 1959.
- Gold, C.: Branchial cleft cyst located in the floor of the mouth. *Oral Surg* 15: 1118-1120 1962.
- Calman, H.I.: Sublingual branchiogenic cyst: Report of a case. *Oral Surg* 16: 333-338 1963.
- Vickers, R.A., Gorlin, R.J., et al.: Lymphoepithelial lesions of the oral cavity: Report of four cases. *Oral Surg* 16: 1214-1222 1963.
- Vickers, R.A. and Muhll, O.H.: An investigation concerning inducibility of lymphoepithelial cysts in hamsters by autogenous epithelial transplantation. *J Dent Res* 45: 1029-1032 1966.
- Knapp, M.J.: Pathology of oral tonsils. *Oral Surg* 29: 295-304 1970.
- Knapp, M.J.: Oral tonsils: location, distribution, and histology. *Oral Surg* 29: 155-161 1970.
- Buchner, A. and Hansen, L.S.: Lymphoepithelial cysts of the oral cavity: A clinicopathological study of thirty-eight cases. *Oral Surg* 50: 441-449 1980.
- Toto, P.D., Wortel, J.P., et al.: Lymphoepithelial cysts and associated immunoglobulins. *Oral Surg* 54: 59-65 1982.
- 長谷川清，松村智弘，他：口腔粘膜にみられたリンパ上皮性嚢胞の二症例について。阪大歯誌 20: 59-62 1975.
- Chaudhry, A.P., Yamane, G.M., et al.: A clinico-pathological study of intraoral lymphoepithelial cysts. *J Oral Med* 39: 79-84 1984.
- Young, W.G. and Claman, S.M.: A lymphoepithelial cyst of the oral cavity: Report

- of a case. *Oral Surg* 23: 62-70 1967.
- 31) Doyle, J.L., Weisinger, E., et al.: Benign lymphoid lesions of the oral mucosa. *Oral Surg* 29: 31-37 1970.
- 32) Acevedo, A. and Nelson, J.F.: Lymphoepithelial cysts of the oral cavity: Report of nine cases. *Oral Surg* 31: 632-636 1971.
- 33) Merchant, N.E.: Lympho-epithelial cyst of the floor of the mouth: A case report. *Brit Dent J* 132: 271-272 1972.
- 34) Guinta, J. and Cataldo, E.: Lymphoepithelial cysts of the oral mucosa. *Oral Surg* 35: 77-84 1973.
- 35) 杉原一正, 朔 敬, 他: 舌下面にみられたリンパ上皮性嚢胞の1例. *日口外誌* 23: 643-648 1977.
- 36) 大枝直樹, 三村 保, 他: 軟口蓋にみられたリンパ上皮性嚢胞の1例. *日口外誌* 28: 192-195 1982.
- 37) Sakoda, S., Kodama, Y., et al.: Lymphoepithelial cyst of oral cavity: Report of a case and review of literature. *Int J Oral Surg* 12: 127-131 1983.
- 38) 河野勝寿, 樋口勝規, 他: 口底にみられたリンパ上皮性嚢胞の1例. *日口外誌* 29: 1637-1639 1983.
- 39) 藤原康次, 河野泰孝, 他: 口腔底に発生したリンパ上皮性嚢胞の2例. *口科誌* 32: 613-617 1983.
- 40) 高山泰男, 見崎 徹, 他: 舌下面に生じたリンパ上皮性嚢胞の1例 (抄). *日口外誌* 29: 2117 1983.
- 41) 寺坂修治, 他: 口腔底にみられたリンパ上皮性嚢胞の1例 (抄). *日赤医学* 35: 60 1983.
- 42) 今本 公, 岩本 忍, 他: 舌下部にみられたリンパ上皮性嚢胞の2例 (抄). *日口外誌* 31: 1254 1985.
- 43) 横尾恵美子, 天竺光雄, 他: 耳下腺内に発生したリンパ上皮性嚢胞の1例. *日口外誌* 31: 1157-1162 1985.
- 44) 柳澤高道, 伴 由美, 他: 口底部にみられたリンパ上皮性嚢胞の1例. *日口外誌* 32: 837-841 1986.
- 45) 安藤龍男, 大熊孝徳, 他: 前後8回の切開排膿をくりかえした側頸部嚢胞の1例. *日口外誌* 12: 150-156 1966.
- 46) Conway, H.: The surgical treatment of branchial cysts and fistulas. *Surg Gynec Obstet* 101: 621-628 1955.
- 47) Van de Mark, T.B., Weinberg, S., et al.: Branchial cleft cysts: A review and case report. *Oral Surg* 28: 149-156 1969.
- 48) 大谷 見, 古内一郎, 他: 先天性側頸嚢腫の2症例ならびに文献的考察. *耳喉* 44: 127-134 1972.
- 49) 太田良夫: 先天性側頸嚢腫の症例. *耳喉* 35: 501-504 1963.
- 50) 大石雄一郎, 木田亮紀, 他: 先天性頸部嚢胞の検討—正中頸嚢胞50例, および側頸嚢胞23例の臨床統計的観察—. *耳喉* 56: 1023-1027 1984.